

第2節 北海道・北見国を命名した松浦武四郎

松浦武四郎は、三重県現松坂市で1818年(文化15年)2月6日に生を受け、1888年(明治21年)東京神田5軒町で享年71歳の生涯を終え、「北海道を命名」した人物です。

松浦武四郎は1844年(弘化2年)～1856年(安政3年)までの間に計6回北海道を踏破しており、1855年(安政2年)江戸幕府より箱館奉行所の蝦夷地御用雇に登用され、未開の地である北海道を調査する命を受けます。

6回目の1858年(安政5年)東西蝦夷地調査で、斜里から始まり常呂川を上り北見・訓子府の地に入り調査した記録「戊午登古呂日誌」に始めて北見地域が歴史に登場します。オホーツク沿岸(斜里から宗谷まで)を調査した時、「北えぞ(樺太)の国が見れる」ことから北見国と命名しました。

明治2年(1869年)明治政府は蝦夷地を北海道と改名し、渡島・後志・胆振・石狩・天塩・日高・十勝・釧路・根室・北見・千島の11国86郡に分け、北見国は常呂郡、紋別郡、網走郡、久摺郡の5郡となり、松浦武四郎が命名した「北見国」が地図上に登場します。

このことが、後の北光社開拓移民団や屯田兵の開拓に大きく貢献したことになります。

明治4年(1871年)には、北海道行政区域が6区に改められ札幌を本庁とし函館・浦河・根室・宗谷・樺太の5支庁となります。

紋別・常呂・網走・斜里の4郡は、釧路・千島と一緒に根室支庁の管轄下におかれ翌年常呂郡には常呂村(トコロ)・鐘沸村(トウフツ)・手師学村(テシヨマナイ)・太茶苗村(フトチャンナヘ)・小牛村(チイウシ)・生顔常村(ムエカエヲツネ)・野付牛村(ノツケウシ)の七ヶ村となりました。

平成18年新北見市誕生に至るまでの歴史では、野付牛村と相内村とは分村と合併(昭和31年(1956年)、生顔常村(現置戸町の一部を含む)が大半が現留辺蘂)は野付牛村から武華村(留辺蘂)と分村と合併、小牛(現忠志)が端野に合併など旧4自治区を形成してきましたが、今合併では明治5年(1872年)の行政区にタイムスリップした形です。

北見国を命名した松浦武四郎を垣間見る碑は、北見市中ノ島町1丁目東1号分離帯に旧北見市開基百年(平成8年 1996年)に建立された「松浦武四郎踏査記念碑」と中ノ島公園内に北見市の歴史看板が立てられています。

◆ 松浦武四郎の痕跡探訪をして見ましょう。<3ヶ所で約20分>



「松浦武四郎踏査記念碑」



「中ノ島公園に通じる第1観月橋」



「松浦武四郎の案内看板」